「男、突っ走る！」

第89回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（23）	『オフィスツリーイン』代表	
国枝　佐代子（58）	『スリジェネ』総合プロデューサー	
山中　敦夫（43）	劇団主宰者	
田所　俊子（62）	市民映画プロデューサー	
阿川　武久（37）	振付師	
野倉　浩太（21）	『スリジェネ』メンバー	
藤田　昇平（21）	『スリジェネ』メンバー	
前川　啓司（29）	『スリジェネ』メンバー	
山森　直海（18）	『スリジェネ』メンバー	
富永　茜（22）	『スリジェネ』メンバー	
大坂　美央（16）	『スリジェネ』メンバー	
阿川　緑（29）	『スリジェネ』メンバー	
坂本　寿梨（19）	『スリジェネ』メンバー	

1　木内家・雅也の部屋

激しく咳き込んでいる雅也が、ベッドで休んでいる。

N「二〇一九年正月。三が日までゆっくり休んだ僕でしたが、まさかの一月四日に突然の発熱と全身の倦怠感に襲われ、病院の診断の結果、インフルエンザを発症してしまいました。市民演劇祭まで残り一ヶ月、一回一回の稽古が貴重な中、この休みはとても惜しいものでした。そして、インフルエンザの影響は、『スリジェネ』のメンバーにも……」

2　南公民館・全景

3　同・大会議室

阿川、昇平、茜、直海、美央、緑、寿梨が集まっている。

阿川「ということで、今日はうっちー、コウタ、マイキーの三人がインフルエンザでお

休みです。本番まで残り一ヶ月を切りました。乾燥しやすい時期なので、皆さんもインフルエンザにはくれぐれも気を付けて、体調管理をしっかりしてください」

一同「はい」

×　×　×

通し稽古をしている昇平、茜、直海、美央、緑、寿梨――演出席で見ている阿川。

4　同場所（時間経過）

休憩時間で、それぞれ談笑している昇平、茜、直海、美央、寿梨――演出席で相談をしている阿川と緑。

と、佐代子が入ってくる。

佐代子「お疲れ様です」

一同「お疲れ様です」

佐代子「（阿川に）どうですか、稽古のほうは」

阿川「今日は、私や緑が代役で入りながら、

通し稽古をしています」
佐代子「来週は、会場でのリハーサルですよね。大丈夫そうですか？」
阿川「会場で通しをすれば、いろいろとアラも出てくるでしょう。それを踏まえて、また稽古を重ねていきます」
緑「今日は男子メンバーがほとんどいませんからね。とにかく、やるしかないんですよ」
佐代子「無事に本番迎えられるんですかね。私は、それだけが心配で。演出だって、上手くいってないでしょ」
メンバーたち「……」
阿川「まあ、うっちーにとっては初めての演出で、いろいろ苦戦してるんです。正解が一つじゃないのと、経験者じゃないから演技経験者のメンバーに指示をすることが難しいみたいで」
佐代子「けど、代表でもあるし、演出と名乗っている以上は、どんな形であれ作品を完成させてもらわないと」

緑「そのために、演出助手や我々演出チーム
がいるわけですから」
直海「（佐代子の元に来て）うっちーは、演
劇経験のまだ少ない中で、自分なりに正解
を見つけようとしてるんです。そりゃ、普
通の演劇の演出と比べたら全然かもしれま
せん。でも、私たちは、元メンバーで今は
代表になったうっちーが頑張ってるからこ
そ、何とか応援しようと思ってるんです。
なるべく、うっちーが考えている理想の形
になるように、私たちもいろんな演技プラ
ンで芝居をして、うっちーに応えたいと」
佐代子「（一同に）本番まであと一ヶ月。気
を引き締めて、稽古に励んでくださいね」
一同「はい」

5　ファミレス（夜）

茜、直海、寿梨が話している。

直海「何もあんな棘のある言い方しなくても
良いのにね」

寿梨「ああ、国枝さん」

茜「うっちーはうっちーなりに、頑張ってる。それは、ずっと稽古場にいる私たちがよく知ってるんだから」

直海「国枝さん、普段稽古場に来ないから、あんな風に言えるんだよ。年末だって、カウントダウンイベントの稽古の時しか顔出さなかったじゃん」

茜「あの人もあの人で忙しいみたいだからね」

寿梨「普段の運営会議も、あんな感じなの？」

茜「うっちーは、基本否定しないじゃん。稽古の時もそうだけど。だから、私たちやヤマさんの意見にも基本的に賛成してるし、メンバーが他の演劇とかのオーディションを受けるって言う相談があったときも、うっちーはいつも賛成するの。けど、ことごく国枝さんは否定するわけよ。だから、うっちーがイエスと言っても、国枝さんがノーって言っちゃうと、もうそれで答えが決まっちゃうんだよ」

寿梨「それじゃあ、うっちーが代表でいる意味ってないじゃん」

茜「ヤマさんも言ってたんだけど、国枝さんは何かあった時に責任を取りたくないから、代表っていう名前でうっちーに押し付けてるんだって」

寿梨「ああ、確かにその可能性もないとは言えないよね」

直海「私、前にうっちーに言ったの。決定権もない名前だけの代表だったら、やめるのも良いんじゃないかって」

寿梨「ナオ、思い切ったこと言うんだね」

直海「だって、見てられないもん。初めての演出だから、うっちーの中では演出に専念したいはずなのに、責任だけ押し付けれる代表になっちゃってさ、それじゃあ上手くいくわけないじゃん。こういうのって、集中力だって精神的な余裕だっているわけだし」

寿梨「そうだよね」

茜「国枝さんって、ヤマさんにもうっちーにも阿川さんにもはっきり言えるじゃん。ということは、それなりの演出力もあるってことだろうね」

直海「そうじゃなかったら、あんな偉そうに言えないでしょう。いくらプロデューサーでも」

寿梨「国枝さんが演出する舞台も、気になるけどね」

直海「確かに」

茜「あと一ヶ月。乗り切るしかないよ……」

6　市民会館・全景

N「一週間後。本番の会場となる市民会館で、リハーサルと通し稽古が行われました。インフルエンザから復帰した僕、コウタ、マイキーにとっては、新年最初の稽古となりました」

7　同・大ホール

音響卓の前で準備をしている雅也――
手伝っている山中。
二階の照明席で準備をしている阿川。
客席で見ている国枝と田所。
×　×　×
緞帳が下がっている――準備を終えた
雅也、音響卓の前に座ると、
雅也「（マイクを持って）では皆さん、これから最初から通していきます。キャストの皆さん、準備はよろしいですか」
緞帳の奥から、メンバーたちの「はーい」
「オッケーです」といった声が聞こえる。
雅也「（マイクを持ったまま）それでは、音きっかけで緞帳を上げてください。緞帳が途中まで上がったら、上手からミオとナオが出てくるようにお願いします。それでは始めます。よーい、スタート」
と、音響卓のボタンを押す――ＢＧＭが流れて、緞帳が上がる。
その途中で、舞台上手から美央と直海

が出てくる。

直海「終わったねぇ、三学期」

美央「うん」

直海「春休み、どっか行きたいね！」

×　×　×

音響席の雅也、照明席の阿川、それぞれ見守るように舞台上を見ている。

×　×　×

浩太「調子はどうだ？」

緑「大丈夫よ。昨日より、大分楽になった」

浩太「よく眠れたか？」

緑「うん」

浩太「やっぱりな」

×　×　×

雅也の隣の席で、じっと舞台を見ている山中――客席でひそひそ話をしている佐代子と田所を見て、不機嫌そうな顔。

×　×　×

茜「ごめん良介。今日も一緒に帰れない」

啓司「そんな気はしてた」
茜「もう少しで完成するから」
啓司「作品作りに専念するのも良いけど、就活はどうなんだ？」
茜「就活はしない」
啓司「え？」
N「普段の公民館の会議室での稽古とは異なり、実際の会場で行うと、舞台転換の遅さや照明の調整、音響の音の大きさ、役者の声のボリューム等、修正すべき点がたくさん出てきました。本番まで残り一ヶ月を切り、この状態で本番を迎えることが無事にできるのかと、僕はリハーサル終わりに国枝さんから忠告されるほどでした」

8　南公民館・廊下～大会議室（一週間後）
N「そして、その翌週のこと……」
鍵を持った雅也が階段を上ってくる―
―美央が既に待っている。
雅也「おはよう、ミオ。今日は早いじゃん」

美央「おはよう。実はさ、みんなが来る前に、ちょっとうっちーに聞きたいことがあって」
雅也「聞きたいこと？」
と、鍵を開けて大会議室に入ると、美央が慌ててドアを閉める。
雅也「どうしたの？」
美央「あのさ、コウタととみーって、付き合ってるの？」
雅也「え？」
美央「絶対付き合ってるよね、あの二人」
雅也「やっぱり、付き合ってるの？」
美央「やっぱりって、うっちーも何か気づいてたの？」
雅也「いや、まだ二人が付き合ってるっていう確証はないんだけどさ……。ミオは、どうしてそう思ったの？」
美央「うっちー、二人のＬＩＮＥのトップ画、気づいてないの？」
雅也「全然気にしてなかったけど」
美央「これ見てよ。これが、とみーのトップ

画」

と、ＬＩＮＥの画面を見せて、足が並んだ状態で撮られた写真を見せる。

雅也「うん、靴が並んでるね」

美央「でしょ。それで、こっちがコウタのＬＩＮＥのトップ画」

と、ＬＩＮＥの画面を見せる――茜と同じ写真である。

雅也「同じだね」

美央「これ、絶対付き合ってるよね。匂わせってやつだよね」

雅也「匂わせてるねぇ」

美央「いつから付き合ってるんだろ」

雅也「あ……」

美央「どうしたの？」

雅也「もしかして、あの時から……」

美央「あの時……？」

雅也「……」

9　カラオケ店・表（回想・第87　話Ｓ３）

茜「私がちょうど、駅を通ってくから、つい
でに浩太乗せてきたの」
浩太、羽織っていたコートを脱ぐと茜
に渡す。
浩太「寒くて、とみーの上着借りてたんだ」
雅也「ああ、そういうこと」

10　農場公園・並木道（回想・第88　話S
12）
田所「本番、私見に行くからね」
雅也「ありがとうございます」
と、二つの人影とすれ違う――雅也、
立ち止まって振り向く。
田所「どうしたの、うっちー？」
雅也「いえ……気のせいですね」
怪訝な顔の雅也――その人影は、茜と浩太で
ある。

11　南公民館・大会議室（回想戻り）
雅也「……」

美央「それだよ。絶対、その時だよ」
雅也「やっぱり、あの二人……」
美央「まさか、メンバー内でカップルが誕生するなんて」
雅也「あれ……」
美央「どうしたの？」
雅也「ねえ、前にさ、とみーとコウタを運営に誘うために、喫茶店行ったの覚えてる？確かあの時、ミオはユミと一緒に別の席にいたじゃん」
美央「ああ、覚えてる」
雅也「あの時、コウタ俺に言ったんだよ」

×　×　×

〈フラッシュ〉
喫茶店での浩太。
浩太「それにさ、俺たちはあくまで、メンバーとしてステージに立つんだろ。そのためだったら、時には厳しいことだって言わなきゃいけないこともある。恋愛関係になんて、まず発展しないよ。そんなことしたら、

お互い稽古やりづらくなるし」

×　×　×

美央「コウタ、そんなこと言ったの」

雅也「どの口が言ってるんだよ、コウタのやつ……」

美央「どうする？」

雅也「ちょっと、タイミング見て、確認しとくわ」

美央「よろしく」

雅也「オッケー」

12　居酒屋（夜）

雅也、山中、茜が話している。

山中「もうすぐ本番だな」

雅也「はい」

茜「お疲れだったね、うっちーも」

雅也「まだまだ。本番終わるまでは、気が緩めないよ。まあ、正直新年早々にインフルにかかるのは予想外だったけど」

山中「多分、免疫が落ちてたんだろ」

茜「極限のストレス状態だったもんね」
雅也「まあね……」
山中「とみーは大分上手くなったけど、個人練習でもしたのか？」
茜「ええ。時間あるときに、コウタと一緒に」
雅也「……あのさ、とみー」
茜「何？」
雅也「単刀直入に申し上げるね」
茜「どうしたの、改まって？」
雅也「コウタと、付き合ってるよね？」
茜「……」
雅也「……」
茜「（苦笑して）やっぱり、もう分かっちゃったか」
雅也「お揃いのトップ画にするなんて、匂わせも良いところじゃん」
茜「ごめん」
雅也「それにコウタだって、運営誘うときに、メンバー同士で恋愛関係になることはないってはっきり言ってたのに」

茜「まあ正直、運営を一緒にやったから、距離が縮まったんだけどね」
雅也「マジで？」
茜「うん。二人でも、いろいろと運営の話をしてたからね。そうしていくうちに、お互い意識するようになっちゃってね」
山中「まあ、そうなるだろうとは思ってたよ」
雅也「え？」
山中「同年代でイケメンのコウタとキレイどころのとみーが一緒に運営やってるんだ。距離が縮まって付き合うだろうなっていうのは、俺としては想定の範囲内だった」
茜「ヤマさん……」
雅也「そうだったんですか……」
茜「え、うっちーはさ、私たちのことにいつから気づいたの」
雅也「今日の稽古前に、ミオが俺に言ってきたの。とみーとコウタって付き合ってるの？って。それで、トップ画が同じになってるのを教えてもらって、ああやっぱり付

き合ってたんだなって」

茜「やっぱりってことは、うっちーの中では前から疑問に思ってたことがあったの？」

雅也「うん」

茜「いつ？」

雅也「最初に気づいたのは、カウントダウンイベントの音源収録のために、カラオケに集まった時」

茜「え？」

雅也「あの時、コウタはとみーの上着を借りてたよね。いくらメンバー同士とはいえ、女子の上着を普通借りる？　俺なんか、年齢の近いレイコ姐さんやシノブの上着を借りるなんて考えられないもん。その小さな疑問が、最初」

茜「すごいね」

山中「女子の上着ぐらい借りるだろ」

雅也「借りませんよ、普通。上着の貸し借りなんて、よっぽど仲が良いか、付き合ってる間柄しか、僕の中では考えられないです

もん」
茜「でも確かに、コウタに告白されたのは、
そのちょっと後」
雅也「ほら」
茜「すごいね、うっちー。その小さな疑問で」
雅也「意外とこういう勘、当たるんだよね。
学生時代もさ、『あれ、もしかしてこの二
人付き合ってる？』って感じることあった
もん」
山中「そういう視点は、ちゃんと鍛えられて
るんだな、うっちーは」
雅也「まあ、僕も学生時代はいろんなことに
巻き込まれましたからね」
山中「（茜に）国枝さんには、報告した？」
茜「いえ、まだ。折を見て、報告しようかと
思ってます」
雅也「あ、ミオにＬＩＮＥに送っとこ。確認
したら教えてって言われたから」
茜「うっちー、ミオと仲良いよね」
雅也「うん。何かね、妹みたいな感じ」

茜「分かるわ」

雅也「（ＬＩＮＥを打って）よし、報告完了」

13　木内家・雅也の部屋（数日後）

Ｎ「市民演劇祭を二週間後に控えたある日のこと……」

雅也が不安そうに電話をかけている。

雅也「（電話に）もしもし阿川さん。今、お時間良いですか？　さっき、マイキーから連絡があって、仕事中に足にケガしたって言うんですよ。詳しい状況は分からないんですけど、もしかしたら演出の変更の可能性も出てくるかもしれません……」

不安な顔の雅也。

つづく